

『エゾシカ研究会』へのお誘い

北海道に生息する野生動物のなかでヒグマに次ぐ大型動物であるエゾシカは、過去には絶滅を危惧された時期もありましたが、その後の保護政策などが功を奏して生息数は次第に回復してきました。しかし、近年は道東地方を中心にエゾシカによる農林業被害や交通事故などが急増しており、その範囲も全道各地に広がっています。

こうした事態を受け、北海道では増え過ぎたエゾシカを適正なレベルに戻そうと、銃猟を主体に狩猟や有害駆除を実施してきましたが、銃刀法の規制強化や高齢化などによるハンター数の減少から、期待される捕獲数の実現は年々厳しくなっています。このため、道では新たに各種ワナを活用した「生体捕獲」を許容するとともに、捕殺個体の有効活用（シカ肉販売）を可能とする流通システムの構築と、新たな食肉需要を創出することで捕獲数の拡大を図ろうと考えてきました。こうした捕獲手法の組合せが功を奏して、道内にはエゾシカ肉を扱う食肉店やレストランも次第に増加しつつあります。

しかし、毎年誕生する小鹿（推定約 20 万頭）に対し、銃猟と生体捕獲を合せた捕獲数は 11 万頭程度に留まり、このうち食肉として流通しているのは僅か 1.4 万頭弱という実態にあります（数値はいずれも 2010 年実績）。また、生体捕獲した鹿は食肉化するまでの期間は牧場で給餌しなければならず、飼養期間の長期化につれ生産コストが高くなるというジレンマを抱えているだけに、飼養牧場には需要の見込みがないエゾシカを受け入れる余地はないとされています。また、銃猟による捕殺後の死骸の多く

はそのまま山中に放置されているか、狩猟者が仕留めた鹿の死骸から一部の肉だけを持ち帰り、残りの部位はそのまま放置されていることが推察されます。

この様に、適正レベルへの頭数調整も困難な状態では、今後も農林業被害は拡大していくことが予測されます。

エゾシカ研究会ではこうした現状を改善し、増加基調にある野生エゾシカを適正レベルまで調整させるとともに、北海道にとって貴重な地域資源とも言えるエゾシカの有効活用を図るためには、従来の発想を超えた新たな方策、例えばエゾシカ肉に対する需要の拡大でエゾシカ飼養の収益性を高め、牧場がより多くの野生エゾシカを捕獲するメリットを見出すことなど、が必要ではないかと考えます。

そこで、エゾシカに関する専門知識を持っていなくても、少しでもエゾシカ問題に関心のある方は、当研究会に積極的に参加して頂き、様々な視点からの意見交換を通して現状の課題を把握するとともに、産業としての可能性などについて語り合って頂きたいと思えます。

北海道を愛し、北海道の自然を愛する道民の一人として、私達の研究会活動に一人でも多くの技術士が参加して頂けることを期待しております。

船越 元（ふなこし はじめ）
技術士（農業／総合部門）

日本技術士会北海道本部
会計監事・エゾシカ研究会
（株）大建設 札幌事務所 技術部長
e-mail : funakoshi@daiken-sekkei.co.jp

